

世界農業遺産「大崎耕土」の保全と活用

宮城県大崎市産業経済部

武元 将忠

2017年12月、宮城県北部に位置する大崎地域1市4町（大崎市、色麻町、加美町、涌谷町、美里町）の『持続可能な水田農業を支える「大崎耕土」の伝統的水管理システム』が、東北・北海道で初となる世界農業遺産に認定された。



写真1 24,300戸の居久根（いぐね）が広がる大崎耕土



図1 位置図

◆厳しい自然環境の中で育まれた「大崎耕土」

大崎地域は、「やませ」による冷害や洪水、渇水が頻発する三重苦とも言える厳しい自然環境の中、水を巧みに活用した様々な知恵や工夫を重ねながら、水田農業と農耕文化、水田の持つ豊かな湿地生態系を育む独特のランドスケープを形成し、藩政時代から「大崎耕土」と称される豊饒の大地を継承してきた。

大崎耕土の水田農業は、「水」「人」「知恵」の3つのつながりで支えられている。大崎地域は、取水堰や隧道・潜穴、ため池、約6,000kmに及ぶ用排水網、水田に洪水調整機能を持たせた遊水地など、上流から下流域まで流域全体を俯瞰した「水のつながり」を築いてきた。水のつながりを支える主体として、「人のつながり」である相互扶助組織「契約講」を基層とした農民主体の水管理体制が構築されている。

また、頻発する「やませ」による冷害に対して、水温を巧みに活用した育苗や深水管理、ぬるめ水路などの農法と農耕儀礼を通じた種籾交換によって耐冷性の高い品種の選定が行われ、「ササニシキ」「ひとめぼれ」という一大品種の基層となり、「知恵のつながり」が構築されてきた。



写真2 300年以上続く水路管理

農家の自給自立的な暮らしと営農を支える屋敷林「居久根」は大崎耕土に24,300戸が点在しており、多様な樹種や草本類で構成され、「水田に浮かぶ森」として、周辺の水田や水路網とつながり、独特のランドスケープを形成するとともに、動植物の生息環境を提供し、豊かな生物多様性を支える大切な基盤となっている。

巧みな水管理による水田農業は、国内最大のマガンの越冬を支え、ため池においては、希少な淡水魚類シナイモツゴやゼニタナゴの生息地となるなど、多様な生きものの保全に貢献している。また、食の安全・安心や生物多様性の重要性を認識し、生態系機能を活かした「ふゆみずたんぼ米」や「シナイモツゴ郷の米」などの米づくりや6次産業化を図り、消費者との交流を通じた共に支え合う仕組みを構築してきた。

将来の担い手育成は「大崎耕土」の価値を伝えていく上で重要であり、地域の小中学生を対象とした「おおさき生きものクラブ」を中心に「シナイモツゴ郷の会」などと連携し、地域の環境保全団体の活動などを学ぶことを通じて農業の価値理解の促進とその価値を伝える活動を行っている。

◆「生きた遺産」として次世代へ継承

先人たちが築きあげ、現代に引き継がれている水田や水路、ため池や居久根など、「生きた遺産」である農業遺産の保全と活用には、農家の暮らしに寄り添うとともに、農業や地域の価値を見える化し、広く共有する仕組みづくりが必要である。

このため、平成30年7月、1市4町ならびに宮城県、土地改良区やNPO等から構成される「大崎地域世界農業遺産推進協議会」に「アクションプラン推進会議」を設置し、「大崎耕土」に広がるそれぞれの地域資源をフィールドミュージアムとして位置づけ、農業システムの保全と活用を行うための具体的な方法等について検討を行っているところである。



写真3 居久根での農業遺産学習

そのような取り組みの一環として、自然と共生する農業の価値を共有するために、消費者や企業などの多様な主体の参画する生きものモニタリング調査の実施や、農泊・民泊も含めたグリーン・ツーリズムの活動に広げていくことなどにより、「大崎耕土」の環境面での価値や評価の向上を図り、これらの取り組みを通じて、世界農業遺産に認定された地域資源を“守るために活かしていく”考えである。